

特集 地域特産作物

Ⅳ 紅花【産地の取組】

山形県における紅花の生産振興 ～山形県紅花生産組合連合会設立から現在まで、取組内容、生産状況～ 山形県紅花生産組合連合会事務局

1 山形県紅花生産組合連合会設立から現在まで (1) 設立の背景

①紅花栽培の始まり

山形県で紅花の栽培が始まったのは室町時代末期とされているが、最上川流域で急速に栽培が広がったのは江戸時代中期で、最盛期には180tの加工品が生産されていたと記録されている。

《山形県で紅花栽培が発達した3つの大きな理由》

◇風土

- ・最上川の肥沃な土壌で形成された広大な弱酸性の畑地
- ・四方を出羽山々や西吾妻連峰に囲まれた朝霧の発生しやすい盆地

◇舟運

- ・日本海で発達した北前船航路と連結できる最上川での物資輸送

◇自由貿易

- ・藩主の交代が頻繁で強大な権力を維持できなかった藩に代わって発達した紅花商人と生産者間の自由貿易市場

②第一次衰退

明治時代になると中国からの輸入が盛んになるとともに、外国産の化学染料が輸入され普及したことにより、山形県の紅花生産は大きな打撃を受け、紅花畑のほとんどは桑園へ転換していった。

③第一次復興

明治42年の伊勢神宮式年遷宮のため、京都の呉服店が本県に紅花加工品を探しにきたことをきっかけに、山形市内の紅屋が中心となり農家に働きかけ、明治39年から紅花栽培に取り組み、41年、42年に紅花加工品を納めた。その後、昭和4年の式年遷宮の際にも大量の加工品生産の依頼を受け、生産を拡大していった。

④第二次衰退

昭和19年には食糧第一主義の作付統制により、紅花栽培は途絶え、食用作物の栽培へと転換していった。

⑤第二次復興

戦後、山形市内の農家に残っていた数少ない種から紅花栽培を復興させるため、有志による紅花振興会が結成された。

紅花復興の動きは、紅花の産地復活へと発展し、昭和40年に山形県紅花生産組合連合会が組織化され、本格的な生産が再開した。

昭和25年：山形市の農家が保存していた一握りの種子で最上紅花の復興を図るため、紅花振興会が結成

昭和29年：山形市志村地区に出羽村紅花栽培組合が結成され、染料や化粧品向けの本格的な紅花生産が開始

昭和40年：山形県紅花生産組合連合会が組織化

(2) 設立から現在まで

昭和40年代後半には、紅花の特性が見直され、化粧品メーカーとの間で大量の契約栽培が行われ、最盛期には800人を超える組合員が36haの紅花を栽培するまでに至った。

昭和40年代の終わりに化粧品メーカーが撤退すると再び需要と生産が落ち込み、以降、一部の本物志向の染物業者や草木染めの愛好家の需要に応じながらも、組合員の高齢化や連作障害の発生等もあり、生産量は漸減していった。

平成になると、食品や化粧品に用いる自然色素の需要が増大し、紅花色素を製造している染料メーカーの業績は急速に伸びていったが、高価な国産の紅花は振り返られることなく、安価な外国産から精製され、県産紅花の需要拡大には結び付かなかった。

また、紅花の薬効成分の研究が進み、機能性食

材として注目され、関連商品の需要が拡大する反面、原料として用いられるものは中国産の安価な紅花が過半を占めた。

近年は、実需者の本物志向や健康、安全性への関心の高まりとともに、伝統的な化粧用の紅の需要も少しずつ増えている。さらには、生薬等の新たな需要も期待されており、供給体制の強化が喫緊の課題となっている。

山形県は、紅花の生産振興とともに、昭和57年に紅花を「山形県の花」と定め、その後15年間にわたって、「紅花の山形路」を銘打った観光キャンペーンを展開した。

また、平成4年に山形県で行われた国民体育大会は、「べにばな国体」と名付けられるなど、紅花を全面に掲げたPRを行ってきた。

2 山形県紅花生産組合連合会の主な取組み

(1) 一元集荷・販売

当連合会は、毎年、全組合員に対して翌年度の生産見込み調査を行うとともに、取引のある実需者に対して需要見込み調査を実施し、需給調整を行った後、予約のあった実需者に加工品を販売している。

(2) 加工品の検品

山形県産最上紅花の品質を保ち、ブランド力を高めるため、加工品（紅餅、すり花、乱花）を一時期に一元的に集荷し、すべての加工品を検査員が検品、等級を格付けして販売している。

(3) 最上紅花シールの作成・配布

安価に流通している外国産紅花と差別化を図るため、山形県産の最上紅花であることを表示したオリジナルシールを作成し、加工品の数量に応じて所定の枚数を実需者に提供している。



(4) 最上紅花優良種子の生産・供給

純良な最上紅花の種子を維持するため、原種を

保管している山形県農業総合研究センターと連携して、優良種子を生産し、組合員のほか、山形県内の希望者に提供している。

(5) 栽培・加工技術研修会の開催

組合員の技術向上と加工品の品質向上を目的とした栽培技術及び加工技術研修会等を実施している。

(6) 紅花振興連絡会議の開催

山形県における紅花の振興を図るため、紅花に関わる多くの団体等（生産者、染色家、食品加工業者、化粧品製造販売業者、学識経験者など）が一堂に会し、それぞれの活動について相互理解を深めるための会議を開催している。

3 生産状況の推移

山形県内の紅花（加工品）の生産は、昭和40年に山形県紅花生産組合連合会が結成されたことにより、県内一円に栽培が拡大した。昭和48年には、化粧品メーカーとの契約栽培が増大し、組合員数600人、栽培面積35ha、生産量3,350kgとなった。その後、需要の減少とともに生産量も減少し、平成20年頃には、組合員数30人程度まで落ち込んだ。以後、需要は徐々に増大していったが、組合員の高齢化や後継者不足、さらには連作障害の発生などもあり、需要に応えられない生産状況が続いた。

近年、山形県と連合会が連携した研修会の開催や紅花栽培の熟達者による栽培志向者への個別指導等の取組みにより、少しずつ新規栽培者が増加してきている。

加工用紅花生産状況の推移
(山形県紅花生産組合連合会)

年次	組合員数 (人)	栽培面積 (ha)	生産量 (kg)
昭和40年	253	4	219
48年	600	35	3,350
50年	260	9	877
60年	122	5	513
平成元年	90	5	418
10年	54	4	229
20年	33	6	241
21年	35	7	248
22年	39	7	119
23年	55	7	109
24年	62	8	255
25年	77	7	145
26年	77	7	181

※資料：山形県紅花生産組合連合会調べ